

Ⅱ 教育課題

第4分科会

知性・創造性

■ 研究課題 ■

知性・創造性を育む教育課程の編成と校長の在り方

分科会の趣旨

学校は、子どもたちに「生きる力」を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識や技能の習得、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成に向けて取り組むことが求められている。そのため校長は、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善を進め、実施上の諸課題の解決につながる方策を明示し、組織として改善することに努めてきた。

こうした取組に加え、先行きの不透明感や閉塞感が一層強まる中、21世紀を生きる子どもたちに、困難に立ち向かい、たくましく生き抜く力を育む取組を進めることが重要な教育課題となってきた。単に知識の獲得だけでなく、目の前の課題や近未来的な課題の解決に向けて、獲得した知識を活用し、柔軟な思考や粘り強さと先見性をもって解決に当たる能力、つまり、新しい知恵やものを生み出すしなやかな知性と豊かな創造性を身に付けることが求められている。

そこで、校長は、柔軟性や粘り強さ、先見性をもって解決に当たる能力や新しい知恵やものを生み出す力を付ける教育課程の成果と課題の把握に努め、その結果をもとに、教育課程の改善を図り、21世紀を生きる子どもたちに必要な資質・能力・態度を育成する創意ある教育の推進に向けて積極的に取り組むことが重要である。

本分科会では、校長のリーダーシップのもと、しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善について具体的方策を明らかにする。

リーダーシップの視点

(1) しなやかな知性と豊かな創造性の育成

子どもたちが、様々な変化や課題に立ち向かい乗り越えるためには、自ら獲得した知識・技能の中からその状況に応じて必要なものを活用し、先の見通しをもって課題を解決していこうとする柔軟な思考や粘り強さと先見性を身に付けさせることが必要である。

そのためには、学習指導が柔軟な思考や粘り強さ、先見性につながるものとして展開され、その内容の充実を意図した評価に取り組まなければならない。

このような視点から、しなやかな知性と豊かな創造性を育む学習指導と評価の在り方を明らかにしていくための校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

(2) しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

子どもたちに今日的な課題を克服していく力を身に付けさせるためには、全教員が子どもたちに育成すべき資質・能力・態度について共通理解を深めるとともに、そのために必要な学習指導の工夫や教材の開発について協働して取り組み、実践の結果をもとに教育課程の見直しを常に図っていく仕組みを確立する必要がある。

そのために校長は、しなやかな知性と豊かな創造性を育むための教育課程編成上の課題を明確にし、実践を通して課題解決を図っていく教員の意欲を引き出し、絶えずより望ましい学習活動の展開に向けて評価・改善を促すようにすることが大切である。

このような視点から、しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程を編成・実施・評価・改善していくための校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

第4分科会

研究課題：知性・創造性を育む教育課程の編成と校長の在り方

研究発表

しなやかな知性と創造性を育むための

学習指導と教育課程編成にむけた校長の在り方

上川地区 中富良野町立本幸小学校

小山田 雅 春

I 趣 旨

知識基盤社会を迎え、国内外における様々な課題が山積する中、これまで学校は、将来を担う子どもたちに、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」の育成を目指し、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に真摯に取り組み、努力を重ねてきた。

今後はさらに、基礎的・基本的な知識・技能の習得はもちろんのこと、獲得した知識を活用し、柔軟な思考や粘り強さと先見性をもって課題解決に当たる能力、つまり新しい知恵やものを生み出すしなやかな知性と創造性をすべての子どもたちに身に付けることが求められている。

そこで、校長は「一校の子どもたちを育てる」という意識での学校経営はもちろん、ひいては赴任地として拝命した地域の負託に応えるべく「一町（市村）の全ての子どもたちを育てる」という視点をもって、校長間の連携を強化しながら学校経営を推進していく必要があると考えた。

そのために校長は、こうした思いや願いを全教職員に浸透させ、直接子どもたちの指導を担う先生方にも「自校の子どもたちだけでなく、同町（市村）の全教職員がチームとして、同町（市村）のすべての子どもたちの成長を期す」という使命感和意識を育んでいかなければならない。

そこで、本研究は、校長間での連携を密にし、「チーム中富良野」という意識を全教職員にも育みながら、各校長のリーダーシップのもと、本町の教育理念を見据え、本町の全ての子どもたちにしなやかな知性と創造性を育むための実践的な研究を進めようとしてきたものである。

II 研究の概要

1 上川管内校長会の取組

(1) 研究の経過と方向性

上川管内校長会では、昨年度より基本主題を「新たな知を拓き人間性豊かな社会を築く児童生徒を育てる学校教育の創造」と設定し、これまでの管内研究の成果と課題をおさえ、本会として長年大切にしているキーワード・合言葉「愛情と信頼」「研鑽と結束」のもと、管内校長会と市町村校長会が一体となって、組織的な

研究を推進し、情報交流を図りながら、その成果を着実に累積してきた。

そして、その一端を昨年度の第56回小学校長教育研究大会渡島・北斗大会[第1分科会:経営・ビジョン]において「創意と活力に満ちた学校経営を推進していくための具体的方策」を提言したところである。

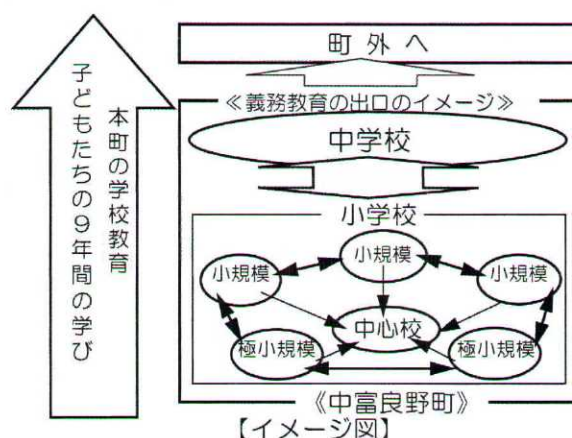
今年度も更に、管内3地区（北部・中央・南部）の各研究会並びに管内教育研究大会を着実な実践と検証及びその成果をともに実感し合う場とおさえ、道小、道中、関係機関との連携を密にしながら、管内の各学校が地域の特性を踏まえた教育推進のための校長の果たすべき役割と指導性を究明し、管内教育の充実・発展に資する研究を推進していこうと考えている。

2 中富良野町校長会の実態と重点的な取組

(1) 実態

中富良野町校長会は、小学校長6名、中学校長1名の計7名である。小学校は、町の中心校の中富良野小学校（児童数229名）の他、あと5校は「へき地・複式校」であり、そのうち2校は、児童数10名以下の「極小規模校」となっている。また、中富良野中学校は、生徒数135名となっている。

(2) 校長会としての重点的な取組



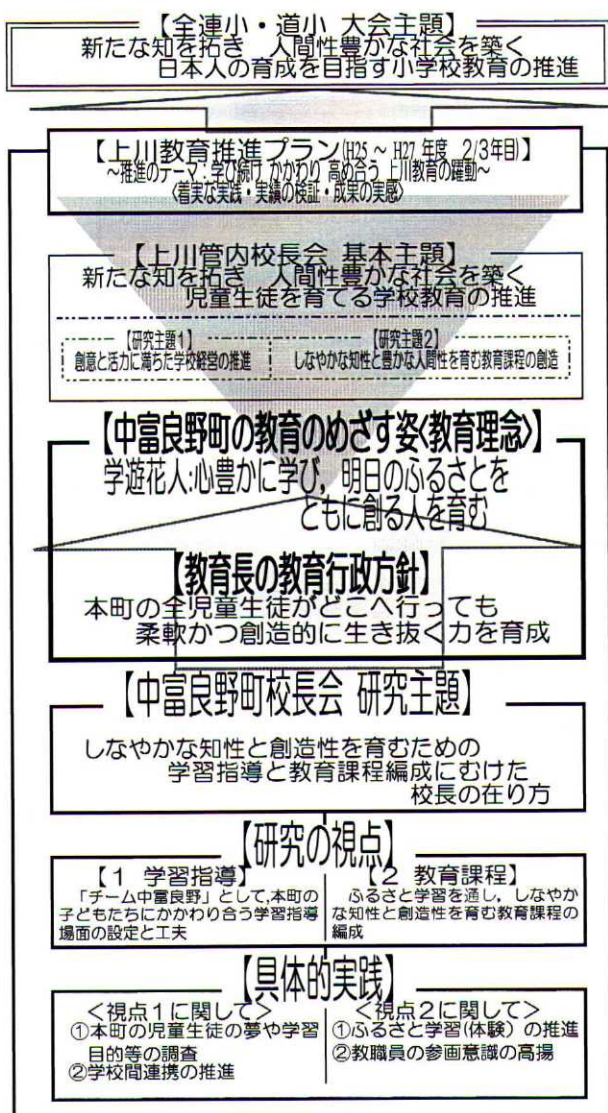
本町では、六つの各地域の小学校で学んだ子どもたちが中学校で一堂に会し、義務教育の集

大成としての学びを終え、町外へ飛び出していく。(前頁【イメージ図】参照)

こうした現状を踏まえ、本町の教育長が今年度の教育行政方針に「学校間連携」を明確に位置付け「義務教育を終えた子どもたちが、どこへ行っても柔軟に対応して生き抜く力の育成」について示された。

このことは、校長会としても重点とおさえ、各校長間の連携を強化し、本町の全教職員一人一人に「チーム中富良野」としての士気を高揚させていくこと、児童生徒がたとえ地域を離れても自己の持ち味や能力を生かし、自分のふるさとを築くしなやかな知性と創造性に富んだ力を身に付けさせることをテーマとし、研究構図に示すつながりを確認しつつ、校長が果たすべき役割と指導性を究明してきた。

3 研究の構造



III 研究の視点について

【視点1】学習指導

全教職員が「チーム中富良野」として、子どもたちに関わり合う学習指導場面の設定と工夫

【視点2】教育課程

ふるさと学習を通し、しなやかな知性と創造性を育む教育課程の編成

IV 研究の視点に関わる実践例

【視点1】～《学習指導》～

「我が校の子どもたち」から

「我が町の子どもたち」への意識改革

「しなやかな知性と創造性に富んだ力」を本町の子どもたち一人一人に身に付けさせていくことを全教職員に共有させていくために下記の2点を押さえた。

- ① 子どもたちの夢や目的を把握した上での、学習意欲の高揚と接続化
- ② 本町の子どもたちが学び合う場の設定及び学校枠を外した多様な学習指導場面の設定による教職員の「チーム中富良野」としての仲間意識や士気の高揚

【事例1】——《校長会レベル》——

- ① 本町の子どもたちの夢や学習目的意識の調査
<目的>

校長はじめ全教職員が本町の子どもたちの将来の夢や学習目的の傾向を把握し9年間を見据えた学習意欲の継続や接続化を図る。

- 全国学力・学習状況調査の児童質問紙による上川管内6年生の実態の認識
- 本町小学校1年生から6年生及び中学生への「夢アンケート」の実施
- 「夢アンケート」の観点別分析
<分析する観点>
*学年別・男女別等の傾向と意識
*本町全体の傾向と意識
- 分析結果から本町の子どもたちの学習目的・学習意欲の果たせ方の取組と工夫

【事例2】——《校長会レベル》——

- ② 学校間連携の推進

<目的>

小学校の子どもたちが中学校で一堂に会することから、6校に分かれている子どもたちの仲間意識の継続化を図るとともに学び合いの良さや協働性を実感させる。また、全教員に対し学校枠を外した多様な学習場面を設定することより指導方法等の見直しや「チーム中富良野」の一員としての士気を高める。

(1) 小学校間交流学習の取組

- 中心校と周辺5校（へき地・複式校）との連結
- 中心校の教頭、教務主任と周辺校各教頭、教務主任による準備体制の確立
- 各小学校の職員会議にて目的の共有
- 周辺5校間の教頭、教務主任による授業者及び授業内容の調整
- 各校の授業者による指導案検討（2回）
- 教育委員会への説明と働きかけ

(2) 小中学校連携の取組

- 推進組織の設置と計画的な推進
- 児童生徒の実態把握と継続した指導
- 具体的な取組の実践と検証
 - * 教員の交流
 - * 小中共通の取組の確認と実践
- 全国学力・学習状況調査及び本町学力検査の分析（算数科を重点）
- 各学年の課題となる単元の洗い出しと指導の系統性から類推した重要単元の確認
- 教育委員会と連携し、小学校低学年から学び方を身に付けさせる支援体制の充実

【視点2】～《教育課程》～

ふるさと学習を通し、しなやかな知性と創造性を育む体験活動を位置付けた教育課程の編成・実施・評価・改善

本町の子どもたち一人一人に本町の教育理念並びに教育行政方針でねらう「地域の伝統を大切にすることと柔軟な知性・豊かな人間性を育む教育課程の編成」のため、校長として、指導性を発揮していくことが重要と考え、下記の2点を押さえた。

- ① 体験を通して学ぶ知恵と課題探求
- ② 教職員の参画意識の高揚

【事例1】～《学校レベル》～

- ① ふるさとの「人・もの・こと」を学ぶことにより、知恵と創造性の育成をねらいとした体験活動の位置付け

<目的>

本町の教育理念「明日のふるさとをともに創る人」を意識し、ふるさと学習を積極的に教育課程に位置付けることで、様々な人との関わりや体験、探求型学習などを通してしなやかな知性と創造性を育む。

- ふるさと学習のねらいと全体構造の提示と共有
- 地域素材（人・もの・こと）を積極的に活用した教育活動の推進
- 各地域の特色を生かした体験活動の位置付け

- 体験活動のねらいの明確化と探求型指導実践・評価

【事例2】～《学校レベル》～

- ② 校長提示の学校改善プランから教職員主体の学校改善プランの作成と組織化

<目的>

「チーム中富良野」の主体は、教職員一人一人であることの自覚を促し、教職員の積極的な参画による教育課程を編成する。

- 学校経営方針による本町の教育理念や教育行政方針に関わる目標の提示
- 目標達成のための具体的取組策定チーム（プロジェクト）を組織
- 各チーム（プロジェクト）による策定・検討の時間を設定
- 各チーム（プロジェクト）より具体策の提案と全職員による共有化
- 目標達成のための具体策を学校改善プラン並びにロードマップへ位置付け

V ま と め

1 成 果

- 自校の子どもたちの成長を全町レベルで意識化を図ることにより、自校の子どもたちの実態を多角的・多面的にとらえるようになった。
- 学校間連携（小学校間交流・小中連携）を推進することで、9年間を意識した中で児童生徒の実態や状況をとらえた指導改善になってきている。
- 小学校間交流学習（2年目）の取組が各校の教務主任を中心として徐々に定着し、教職員の「チーム中富良野」としての意識も高まってきている。

2 課 題

- 校長として、各取組のねらいや目的を学校経営方針に位置付け、職員のやらされ感や多忙感につながらないような配慮・工夫が必要である。
- 本町の児童生徒が9年間の義務教育を終えた時の児童生徒像を、発達段階に応じて明確にし、教育課程の工夫・改善を推進する必要がある。
- 小学校間交流学習において、先生方が単式・複式のいずれの指導もでき得る体制づくりを進める必要がある。
- 小中連携において、児童生徒交流の目的の共有化を図り、教育課程に位置付ける必要がある。